

岡田 岳, 他 (編)

OT 症例レポート赤ペン添削 ビフォー&アフター

田 中 勇次郎
(東京都作業療法士会, 会長)



この本の代表編集者である岡田氏から書評を依頼されたときに、タイトルから養成校の教員の方が適していると感じて、このことを彼に伝え、「教員に依頼したのが断られてしまい、困っている」とのことで引き受けることにした。

2020 年から実習形態が症例基盤型実習から診療参加型臨床実習 (clinical clerkship: CCS) へと変更される見通しであり、このような時期に養成校の教員にとって、臨床実習を想定した症例レポートの書き方に関する本の書評は書きづらいのだろう。

さて、この本を一読した感想であるが、「です・ます」調の文体であるためか、丁寧に書かれている印象を受けた。また、「どのように書けばよいかわからない」学生を、何とか支えようとする執筆者たちの「思い」も感じた。

章立ては、序章、第 1 章：身体障害領域の症例レポート、第 2 章：精神障害領域の症例レポート、第 3 章：高齢期障害領域の症

例レポート、第 4 章：発達障害領域の症例レポートになっている。

序章では、「症例レポートの書き方」の中に、実習に行く前の心構えや実習指導者とのコミュニケーションの取り方なども記載しており、単に症例レポートの書き方のコツを教えるだけでなく、学生が実習でつまづかないようにと願う執筆者の気持ちが表れている。

1~4 章では、各領域において臨床実習で担当する可能性の高い疾患を選び、まず学生が書いた（模擬かもしれない）レポートを掲載して、このレポートで修正すべき箇所に赤線を引き、その内容を「赤ペン添削」として提示している。これを「ビフォー」とし、「赤ペン添削」で指摘した部分を加筆・修正してレポートを完成させ、これを「アフター」として掲載する構成になっている。その他、「+α知識」や「おすすめ書籍」等も載せ、学生の学習を支援する情報を提供している。

筆者もこの数年、養成校の教員

を経験し、症例レポートの書き方に苦勞する学生を見てきた。このような学生には、『作業療法ジャーナル』等を見てまねするように伝えてきたが、この本があれば参考書として活用できたのではないかと感じている。その意味では、書くことに苦勞している学生だけでなく、学生を指導する立場の実習指導者や教員にも役立つ本といえるだろう。

終わりに、これは本筋のことではないが、レポートの治療プログラムの中で要望したいことがある。それは、環境因子への働きかけである。この部分に視点を置いた事例を提示してもらいたい。物理的な環境要因を変更することで「できるようにする」発想も、OT 学生にはもたせる必要があるだろう。

B5 判 280 頁 3,600 円+税
羊土社 刊
☎ 03-5282-1211